伊那市埋蔵文化財調査報告書　第２集

市内遺跡発掘調査報告書

－平成21年度 長野県伊那市内遺跡試掘調査報告書－

2010.3

伊 那 市 教 育 委 員 会

伊那市埋蔵文化財調査報告書　第二集　市内遺跡発掘調査報告書　－平成二十一年度　長野県伊那市内遺跡試掘調査報告書－

市内遺跡発掘調査報告書

－平成21年度 長野県伊那市内遺跡試掘調査報告書－

2010.3

伊 那 市 教 育 委 員 会

例　言

1　本書は、長野県伊那市が平成２１年度に国宝重要文化財等保存整備費事業補助金を受けて実施した、開発事業にともなう試掘調査報告書である。

2　現場での調査及び報告書の編集・発行は伊那市教育委員会が行った。

3　現場での調査期間は調査ごと本文に記載してある。なお、報告書作成業務は随時行った。

4　第２章は、調査期日順に掲載している。

5　出土遺物及び調査の記録は伊那市教育委員会で保管している。

6　調査及び報告書作成にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

目　次

例言・目次

第１章　発掘調査について・・・

第１章　発掘調査について

１　調査の概要

伊那市内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として４２５か所が確認されている。

平成１８年３月３１日に伊那市・高遠町・長谷村の１市１町１村が新設合併し、新たな伊那市が誕生した。これにより、市の面積は当然のことながら、保護していくべき市民の宝である文化財の数も、あらゆる分野で増えることとなった。

伊那市教育委員会では、遺跡内で計画される開発行為について協議を行い、確認調査が必要なものについては、編成された伊那市遺跡調査団において調査を実施した。なお、この調査については、国庫補助事業および市単独事業として実施された。

報告書編集時(平成２２年１月)までに提出された、平成２１年度における発掘届出書(９３条）は５件、発掘通知書（９４条）は８件であり、そのうちの４件について試掘・確認調査を行った。また、遺跡の隣接地にあたる開発での１件についても試掘・確認調査を行った。

伊那地区における試掘・確認調査は生涯学習課が、高遠町地区における試掘・確認調査は高遠長谷教育振興課がそれぞれ担当した。

２　調査組織

伊那市遺跡調査団（平成２１年度）

団　　長　北原　　明（伊那市教育委員会　教育長）

調査担当　伊那地区（北丘Ｃ遺跡・蟻塚城跡遺跡・地神原遺跡・伊那養護学校遺跡）

飯塚政美（日本考古学協会会員）

高遠町地区（堀遺跡）

丸山敞一郎（日本考古学協会会員）

調査団員　伊那地区

高松慎一（生涯学習課文化財係）

福澤浩之（　　〃　　）

藤井千明（　　〃　　）

北原房之

小松勝司

高遠町地区

丸　山　　敦（高遠長谷教育振興課長）

春　日　博　実（高遠長谷教育振興課文化財係長）

伊　澤　まゆみ（高遠長谷教育振興課文化財係）

大　澤　佳寿子（　　〃　　）

（事 務 局）

事務局長　北　原　秀　樹（伊那市教育委員会生涯学習課長）

事務主幹　唐　木　芳　樹（伊那市教育委員会生涯学習課文化財係長）

事務局員　高　松　慎　一（伊那市教育委員会生涯学習課文化財係）

第２章　試掘調査

Ⅰ　北丘Ｃ遺跡

１　所 在 地　　伊那市東春近１０７４６番地７３

２　調査期間　　平成２１年（２００９）　５月２８日～２９日

３　調査面積　　２０２㎡

４　調査原因　　展示施設の建設

５　調査担当　　飯塚政美

６　検出遺構　　なし

７　出土遺物　　縄文時代中期土器片

８　遺跡の環境と調査にいたる経緯

北丘Ｃ遺跡は、長野県伊那市東春近木裏原に所在している。伊那市街より遺跡該当地までに至る最短距離は次のとおりである。まずＪＲ飯田線沢渡駅で降車し、西方へ３００ｍ程進むと第一河岸段丘につきあたる。これを登りつめると平坦面が広がり、その展開面の北限に犬田切川が西から東流している。この地域は犬田切川の河口地点に属し、付近一帯は森林地帯を形成している。この中に「かんてんぱぱ」として著名な「伊那食品工業株式会社」の本社、展示場等が建てられている。この付近は緑の中に前述した建物以外に特殊な施設が設置されており、訪れた人々の憩いの場所として人気の観光スポットとなっている。

北丘Ｃ遺跡の範囲は、これらの施設の一部を含んでおり、今回の調査もその一連である。終戦後、新たに農耕隊によって切り開かれ、それに関して逸話が数多く残されている地域でもある。標高は６８０～６９０ｍ程度で、割合に高い面に位置している。

伊那谷に一般的に通ずる地形は西側に中央アルプス、東に南アルプス、その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。両山脈に囲まれた中央の最低部に諏訪湖に源を有する天竜川が流れ、一般的に呼称されている縦谷状地形を形成している。天竜川の両岸には数多くの小河川が発達し、それらの反復運動によって、扇状地、河岸段丘、渓谷が形成されている。伊那市中心地付近では小沢川、三峰川、小黒川が主たる河川で前述したような運動を繰り返し、現在のような形態を造り上げた。

今回、取り扱っている西春近の主な河川は北から小黒川、戸沢川、小戸沢川、犬田切川、猪の沢川、大洞、前沢川、藤沢川、堂沢川、大沢川等々である。

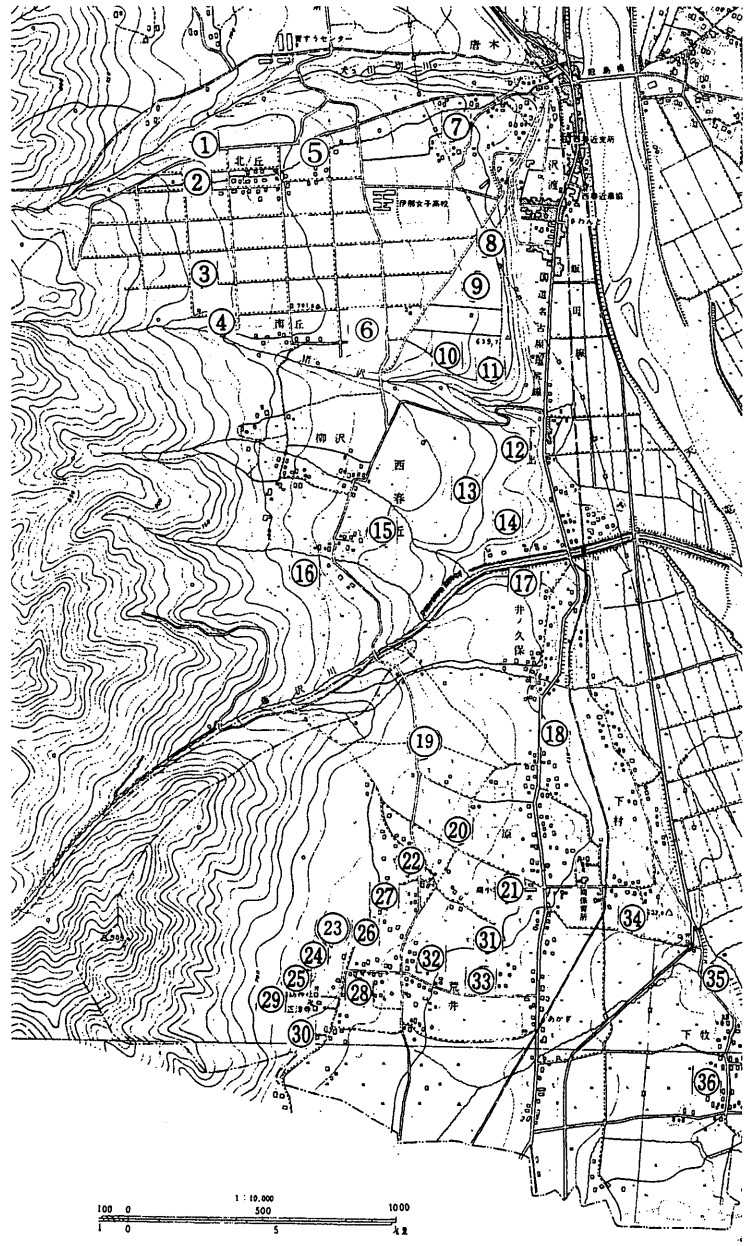
本遺跡地の主流は前述したように南北に流れる天竜川と東へ流れる犬田切川の２か所である。なかでも主体を占めているのは犬田切川である。本遺跡の立地条件に極めて密接な

関係を有する犬田切川に焦点を絞ってみる。犬田切川は権現山を源とし、西から東へ流れて天竜川と合流する川で、西春近で大きな川の部類に含まれている。水量は通常は割合に少なめであるが、一旦雨が降ると増水が著しく、近年、砂防ダムができるまでは下流は洪水の危険にしばしば悩まされた。犬田切川付近の名称は、よく言われている「田切地形」と何らかの関係があると推定できる。

基盤を構成しているのは花崗岩が多く、木曽山脈の中では極めて見事な花崗岩が産している。花崗岩の組成としては見事であり、固く、岩石内にしっかりとした鉱物を多量に含んでいるので、石屋仲間の間ではとても大事にし、石垣によく使用されている。天竜川西側から産する花崗岩は川ごとによって、含有鉱物の内容、固さが異なっている。したがって、含有鉱物の違いで、どこの産かはすぐに分かる。

遺跡の名称

①北丘Ｂ	②北丘Ａ
③南丘Ｂ	④南丘Ａ
⑤北丘Ｃ	⑥南丘Ｃ
⑦眼子田原	⑧山の神
⑨上の塚	⑩沢渡南原
⑪下小出平	⑫天伯
⑬下小出原	⑭天伯原
⑮東田	⑯南村
⑰井の久保	⑱表木原
⑲山の下	⑳高遠道
㉑西春近南小学校	㉒鳥井田
㉓菖蒲沢	㉔富士塚古墳
㉕富士山下	㉖広垣外Ⅰ
㉗広垣外Ⅱ	㉘宮入口
㉙和手	㉚上手南
㉛城の腰	㉜安岡城
㉝横吹	㉞寺村
㉟下牧経塚	㊱下牧



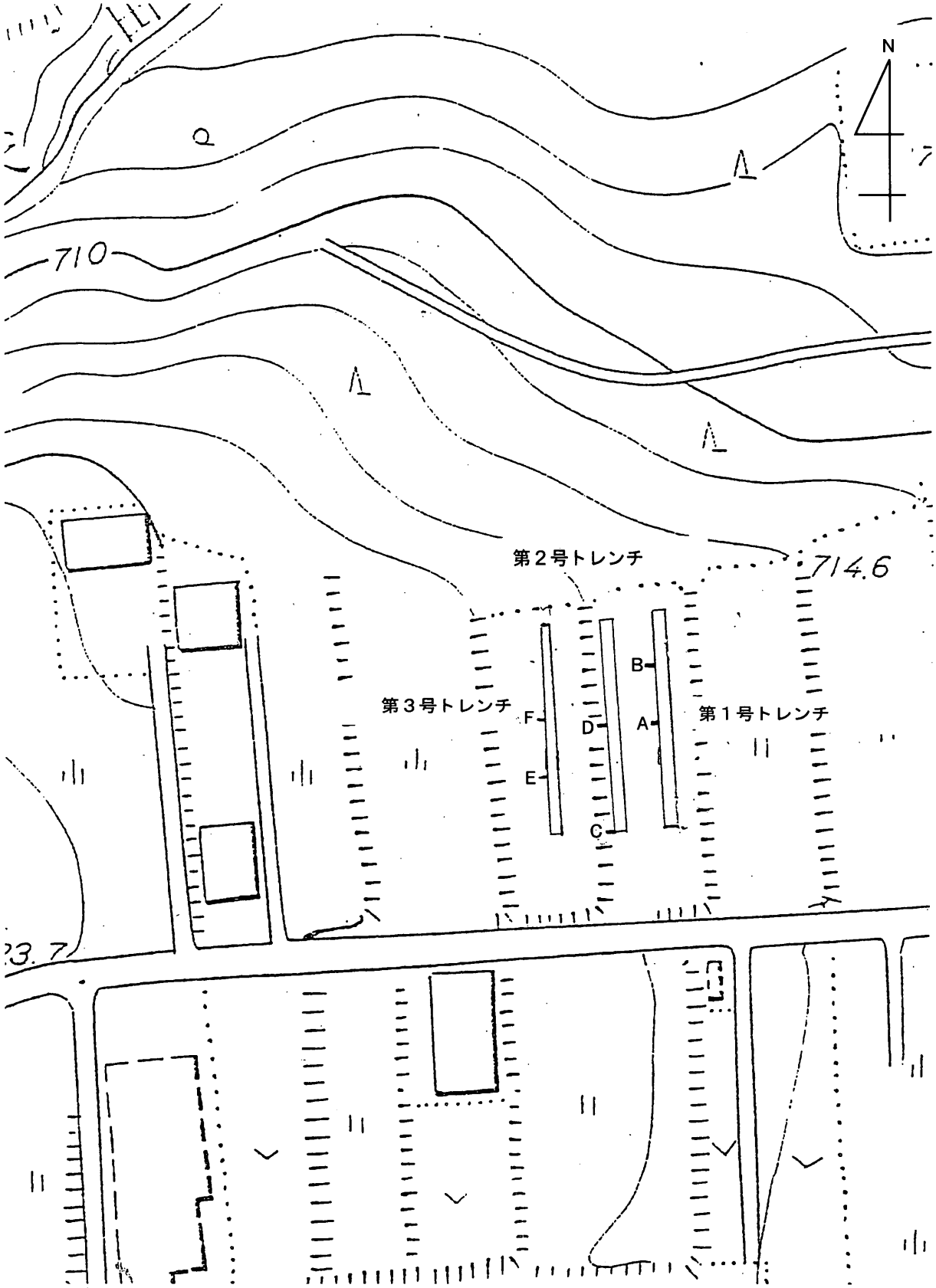
第１図　位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図

北丘Ｃ遺跡は前述したように犬田切川の右岸、同河川の河岸段丘上にある。遺跡の存在性は水との関連が強い。よって大小河川とそれに密接した遺跡名を第１図に基づいて記す。犬田切川に面した遺跡としては北丘Ｂ遺跡、北丘Ａ遺跡、北丘Ｃ遺跡、眼子田原遺跡があげられる。猪の沢川に面した遺跡としては南丘Ｂ遺跡、南丘Ａ遺跡。前沢川に面した遺跡として下小出原遺跡、東田遺跡、天伯遺跡があげられる。藤沢川に面した遺跡として山の下遺跡、井の久保遺跡があげられる。堂沢川に面した遺跡としては上手南遺跡、宮入口遺跡、広垣外Ⅰ遺跡、広垣外Ⅱ遺跡、城の腰遺跡、横吹遺跡、鳥井田遺跡があげられる。天竜川右岸段丘面の遺跡としては山の神遺跡、上の塚遺跡、沢渡南原遺跡、表木原遺跡、寺村遺跡、下牧遺跡、下牧経塚遺跡があげられる。

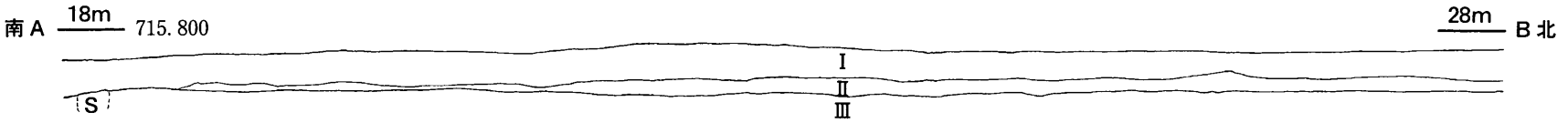
北丘Ｃ遺跡に隣接した北丘Ｂ遺跡は昭和４７年度に実施された中央自動車道開削前に大々的に発掘調査を実施し、多大な成果を収めている。この調査結果は日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会刊行『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市西春近）』として一冊の立派な報告書にまとめ上げられ、その中をさらに遺跡毎に微々細々に記述し、掲載してある。

今回、遺跡の西部において展示施設建設の計画があり、事前に試掘調査を実施した。建設予定地の南北方向に３本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

発掘風景

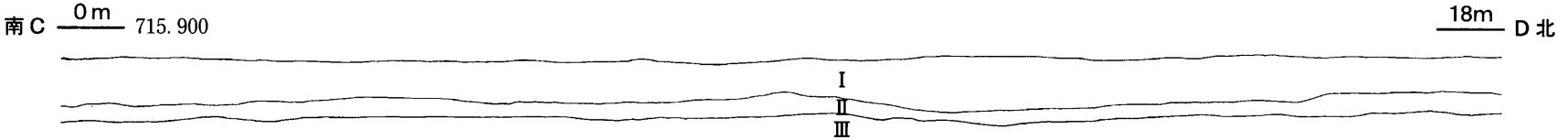


第２図　発掘調査概要図（1：1,000）



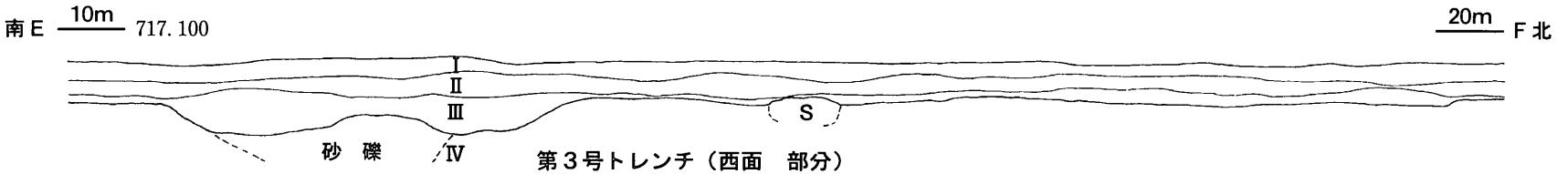
第１号トレンチ（西面　部分）

Ⅰ 黒 色 土：耕土
Ⅱ 黒褐色土：黒色が強いが、極少量の褐色土を含む。Ⅰに比べ、ややしまる。
Ⅲ テ フ ラ：直径 80cm 以下の礫及び砂が多量に混じる。



第２号トレンチ（西面　部分）

Ⅰ 黒 色 土：耕土
Ⅱ 黒褐色土：Ⅰに比べ、ややしまる。
Ⅲ テ フ ラ：人頭大以下の礫及び砂を多量に含む。



第３号トレンチ（西面　部分）

Ⅰ 砕　　石
Ⅱ 黒褐色土：ややしまる。
Ⅲ 暗褐色土：固くしまる。
Ⅳ テ フ ラ：やや砂が混じり固くしまる。岩や礫を多く含む。

第３図　各トレンチ土層断面図（部分 1：60）
（各地点は第２図参照）

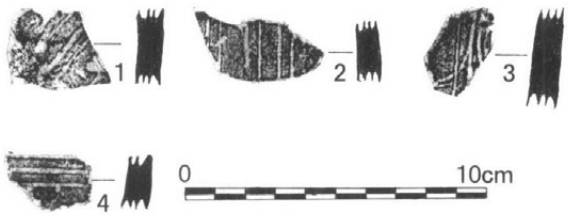
9　調査の成果

今回、発掘調査地区内での遺構の検出は、全般的に砂礫層の推積が厚く、常に流れた形跡が窺え、遺構の出現はあり得そうもなかった。遺構の発見はなかったが、遺物が少量出土した。

掲載する第４図出土土器拓影図は今回の試掘調査のうち、第１号トレンチ内より出土した土器片であり、２つのブロックになっていた。それらのうち、No. １は３片、NO. ２は６片より成り立っていた。第４図の１～４は同一個体であり、やや厚手の部類に属し、赤褐色を呈し、焼成は比較的に良好であった。文様は細沈線を斜目（１）、縦位（２）、縦位とやや蛇行状に組み合わさったもの（３）、横位に走っているもの（４）等々様々に施して文様の効果を増している。縄文中期初頭の平出ⅢA式の一派に含まれると思われる。

北丘Ｃ遺跡の試掘調査は今回が最初であり、従って未知数の点が多かった。試掘調査地点は犬田切川右岸の低い第二河岸段丘面上で砂層と大きな花崗岩の推積層が厚く覆っており、一見するに遺跡の存在性は希薄と思われた。検出した土器片は第４図拓影に掲載したように細片が多い。これらの土器片は上から流下してくる時に角がとれて丸みを呈するようになったと察せられる。

周辺の状況から見て、前述したように存在性は希薄と察せられる。仮に遺物を発見した場合、その形状を見て、流れてきたものかどうか判別する必要性があろう。



第４図　出土土器拓影

第１号トレンチ内土器出土状況

調査前　全景（南側より）

第１号トレンチ（南側より）

第２号トレンチ（南側より）

第３号トレンチ（南側より）

Ⅱ　堀遺跡（３次）

１　所 在 地　伊那市高遠町勝間２２２ほか

２　調査期間　平成２１年（２００９）　７月３０日～　８月　７日

３　調査面積　２１０㎡

４　調査目的　遺跡の範囲確認調査

５　調査担当　丸山敞一郎　大澤佳寿子

６　検出遺構　な　し

７　出土遺物　縄文土器片　黒曜石片

８　遺跡の概要と過去の調査歴（第８図）

堀遺跡は三峰川左岸の河岸段丘上に位置する。三峰川によって小さな河岸段丘が何段か形成されている。海抜およそ７７４ｍ。堀遺跡は大正年間の鳥居龍蔵博士調査の折、土器の出土が記録されている。

最初の発掘調査（第１次調査）は、農業基盤総合整備事業に係る調査で、昭和５５年に範囲確認調査、翌５６年に本調査が行われた。範囲確認調査の結果、縄文時代（中期）、弥生時代、平安時代の遺構・遺物が検出された。東西径２５０ｍ、南北径３００ｍの楕円形状の範囲、およそ７５，０００㎡であることが確認された。原則盛土をして現状保存することとしたが、盛土用の埋土を確保するために２，４００㎡を発掘調査した。縄文時代中期の竪穴住居址２、集石群３３基、平安時代の竪穴住居址８、中世の濠渠址などの遺構、縄文時代中期、平安時代、中世の遺物が検出された。遺跡の重要性が改めて確認されたため、遺構面の上に４０ｃｍ盛土して保存することとした。

第２次調査は、特別養護老人ホーム「さくらの里」建設事業に係る調査で、平成１２年に範囲確認調査（調査面積およそ６，０００㎡）、翌１３年に本調査を実施した。範囲確認調査の結果、調査地の一段低い北側３分の２は遺構、遺物ともに全く検出されなかった。南側３分の１について記録保存を行った（調査面積およそ２，０００㎡）。縄文時代中期の竪穴住居址６、溝状遺構１、縄文時代中期の土器・石器、平安時代の灰釉陶器・土師器・須恵器等が検出された。

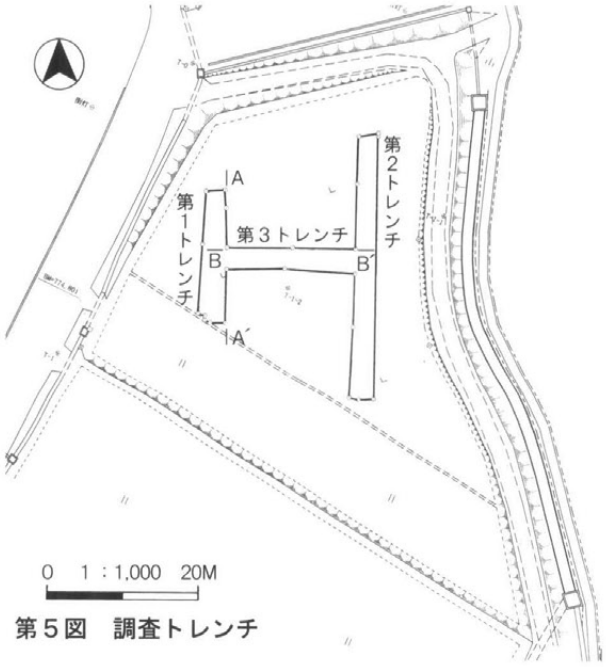
第３次調査になる今回の調査は、「さくらの里」グループホーム建設事業に係る調査である。建設予定地は堀遺跡の東端に位置し、面積はおよそ２，３００㎡である。南北に第１トレンチ（１７ｍ×３ｍ）・第２トレンチ（３４ｍ×３ｍ）の２本のトレンチ、両者をつなぐ東西に第３トレンチ（１７ｍ×３ｍ）を設定し（第５図）、重機を使用して掘削を行なった。

９　調査の成果

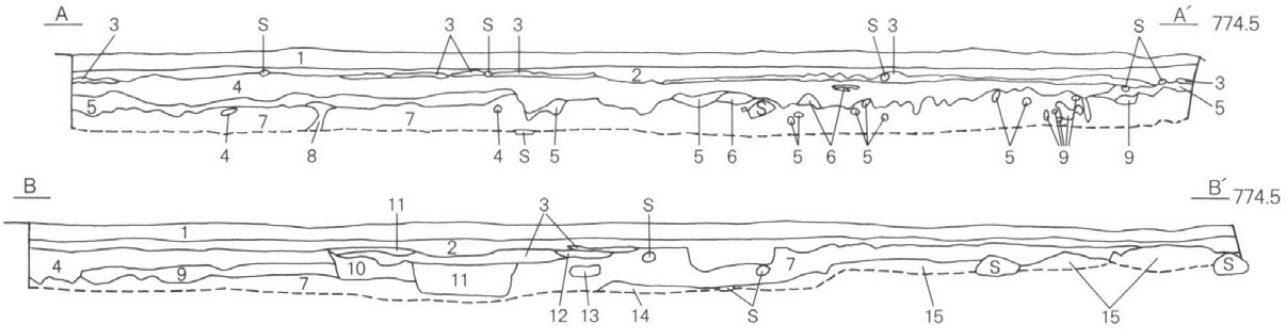
第１・２・３トレンチともに１５～２０㎝の水田耕作土、その下に１０㎝の水田床土が

ある。第１トレンチでは、水田床土の下に水田造成時に運ばれた褐色土、暗褐色土が堆積しており、徐々に自然堆積の黄褐色土に移っていく。表土からおよそ１ｍの深さで砂利交じりの礫層になる。第２トレンチでは、水田床土の直下から砂利交じりの礫層となっている。第２トレンチのあたりは、地主さんの話によると一時果樹園にしたことがあるということで、霜よけにタイヤを燃やした跡が確認された。第３トレンチは、水田床土の下の西側半分ほどは第１トレンチと同じ状況であり、東に行くに従って自然堆積の黄褐色土、砂利交じりの礫層が高まっている。出土遺物は黒曜石の小さな破片が１点と、縄文時代中期の磨耗した小さな破片が４点検出されたのみであった。堀遺跡の範囲はこの辺りまでは広がっていないと考えられる。

堀遺跡の遠景



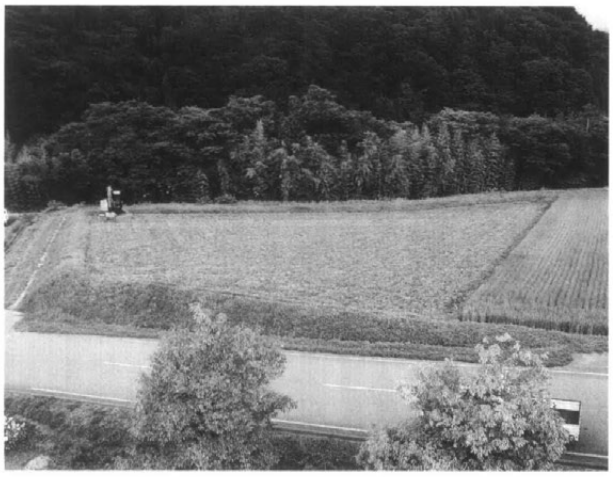
第５図　調査トレンチ



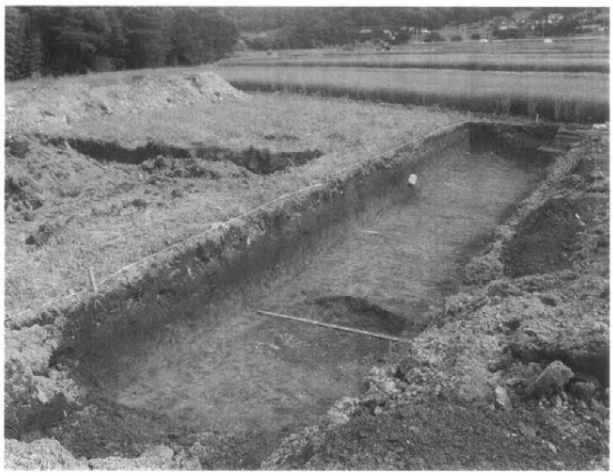
1　黒褐色土(7.5YR3/2)軟らかい
2　黒褐色土(7.5YR3/2)硬い
3　褐色土(10YR4/6)
4　暗褐色土(10YR3/4)
5　褐色土(10YR4/4)
6　褐色土(7.5YR4/4)
7　黄褐色土(10YR5/6)
8　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
9　褐色土(10YR4/6)に暗褐色土(10YR3/4)を含む
10　暗褐色土(10YR3/3)
11　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色土(10YR5/6)を含む
12　黒褐色土(7.5YR3/2)
13　黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色土(10YR5/6)を含む
14　黄褐色土(2.5YR5/4)
15　黒褐色礫(2.5YR5/6)砂利交じり

0　1：100　5M

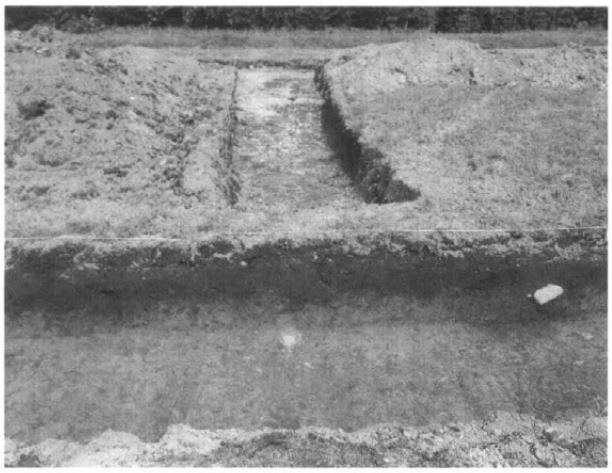
第６図　調査トレンチ断面図



調査前　全景



第１トレンチ

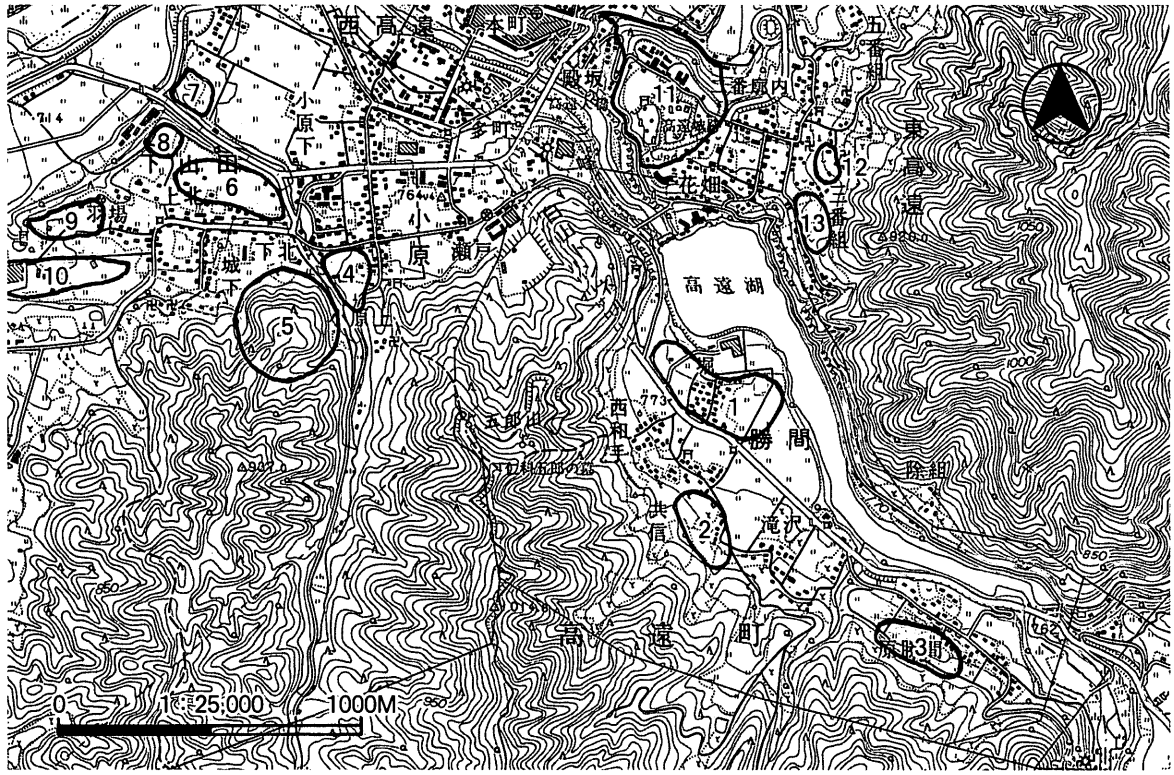


第１トレンチ（手前）・第３トレンチ（奥）

第２トレンチ（南側より）

第３トレンチ（西側より）

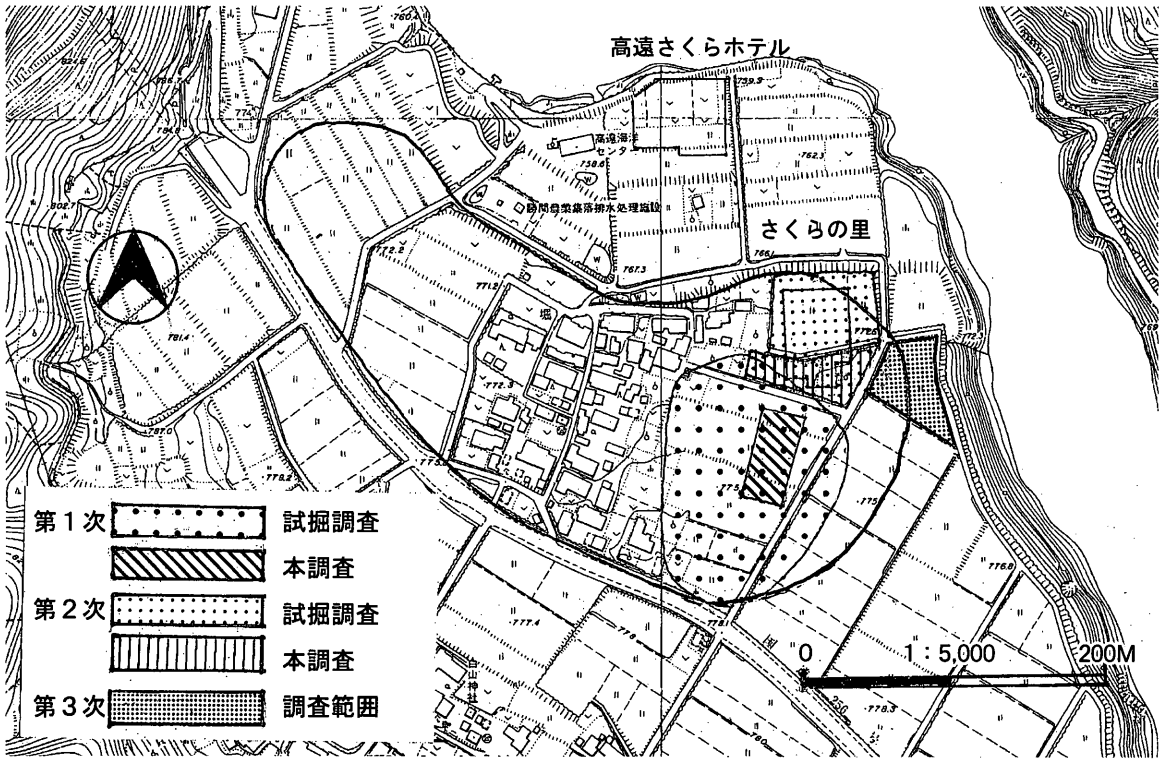
出土遺物



第７図　堀遺跡位置図

（国土地理院発行 1:25,000 地形図「信濃溝口」を使用）

① 堀　② 西勝間　③ 原勝間　④ 後沢　⑤ 山田城
⑥ 北垣外　⑦ 丸山城　⑧ 山田古城　⑨ 竹垣外
⑩ 八幡原　⑪ 高遠城跡　⑫ 花畑　⑬ 桂泉寺(院)



第８図　堀遺跡発掘調査地

Ⅲ　蟻塚城跡遺跡

1　所 在 地　　伊那市美篶２８５１番地

2　調査期間　　平成２１年（２００９）　１０月１９日～２０日

3　調査面積　　５．６㎡

4　調査原因　　標識の設置

5　調査担当　　飯塚政美

6　検出遺構　　なし

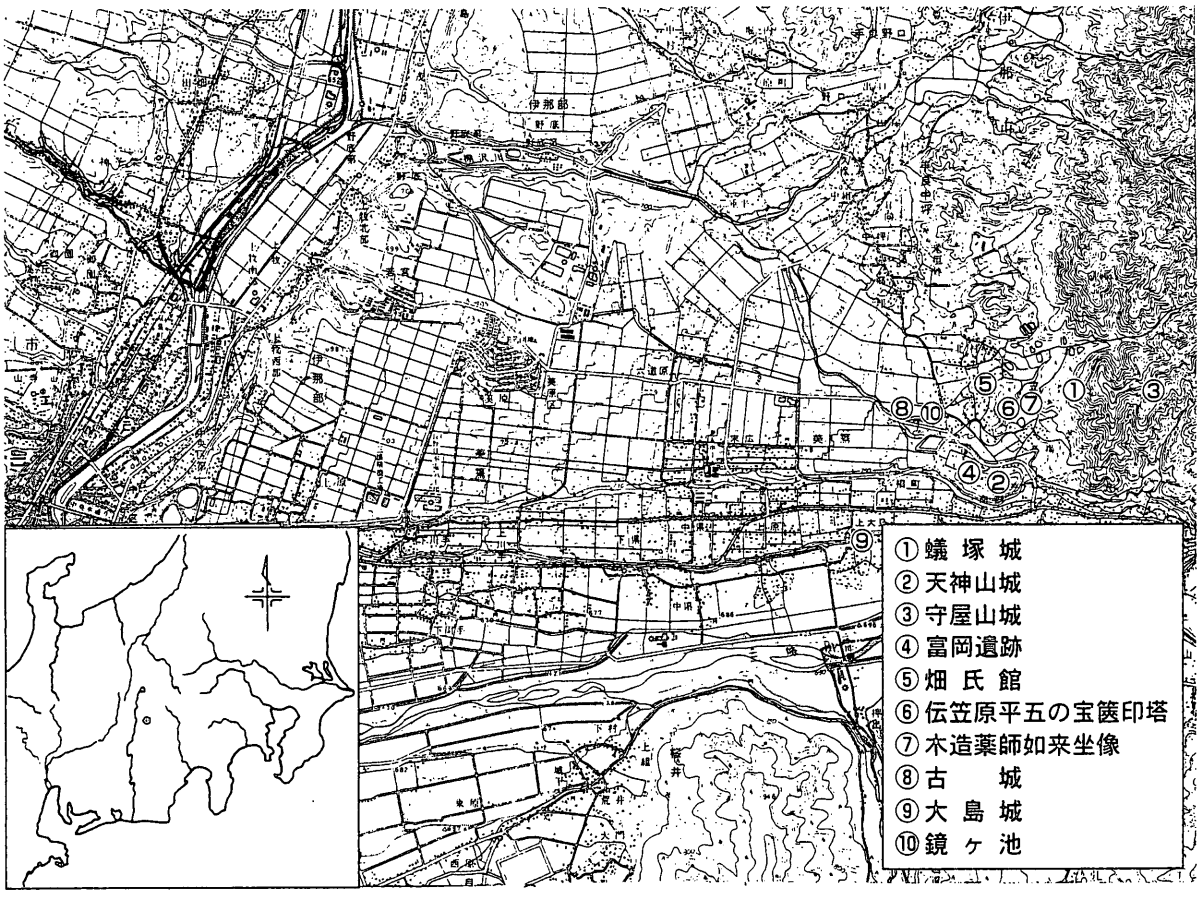
7　出土遺物　　室町時代後期～戦国時代　常滑陶器片

江戸時代初期　瀬戸長石釉陶器片・瀬戸灰釉陶器片

火打石

8　遺跡の環境と調査にいたる経緯

蟻塚城跡遺跡は長野県伊那市美篶笠原の東端部に所在しており、三峰川右岸第二河岸段丘面と、その最北末端と山麓線の重なり合った場所に該当している。この笠原付近でよく取り上げられるのに天神山があげられる。これの成因は火山説、残丘地形説等々が提出されている。前述した山麓線上より多くの沢水が湧き出し、これらを集めて西へ向かって流れ、天竜川に合流する。これらの流れは、普段は少量であるが、一旦、雨が降りだすと、



第９図　位置及び遺跡分布図（蟻塚城跡遺跡付近の中世の遺跡　1：50,000）

いわば天竜川の支流的意味合いを有しているので、天竜川との合流地点はどの河川でも多量の水量を満たしている。天竜川に流れ込む途中は多くの湿地帯が連なり、広い面積の良田を形成している。

笠原地籍の西側には幕末に造られた「六道堤」が満々と水をたたえている。この堤の土手には補強用の松・桜が植栽されており、どれも古き歴史を感じさせる程に大木になっており、春ともなれば桜が咲き、多くの人々の眼を楽しませてくれる。

この笠原地区は、古くは『延喜式』、『吾妻鏡』等々の古文献に登場するように古くから開けた所として有名であり、特に「笠原の御牧」については論点の絶えない現場である。

本城郭跡の周辺には城郭に関連した時期、つまり歴史学で言う「中世」に関連した遺跡・遺物が存在している。それらは石造物・仏像等々であり、当然ながらかつては城郭を中枢にした郷村制集落の繁栄を偲ばせてくれる。蟻塚城跡遺跡は、別名「中之城」と呼ばれ、山麓線のへりに構築されている。この山麓を登りつめた頂上には「守屋山城」が築かれ、この二つの前面に「天神山城」が単独に存在している。笠原集落の西端に「古城」なる地形が現存しており、かつての城館跡を裏付けてくれる。

石造物としては、伝笠原平五頼直の宝篋印塔、仏像としては胎内銘の明らかな「木造薬師如来坐像」が注目され、二つとも南北朝期から室町前期頃と位置付けられている。

大著『定本　伊那谷の城』によれば、蟻塚城跡遺跡とその周辺の歴史的環境について記すと次のようになる。

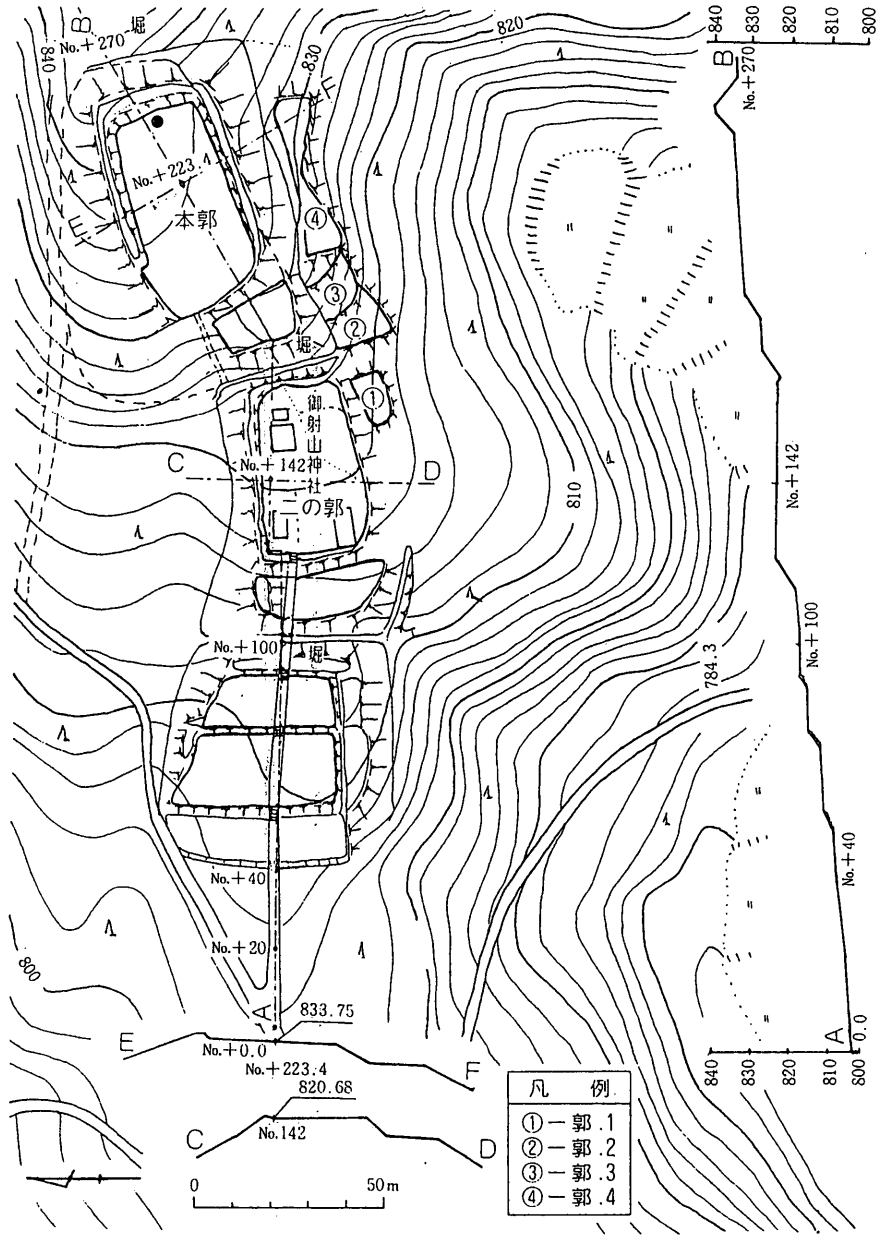
蟻塚城跡遺跡は別称「中之城」と呼ばれ、伊那市の東端部に属する美篶笠原馬場地籍に位置し、城郭の範囲は山麓線上から山頂に及ぶ広範囲にあり、南東側は俎板峠（まないた）を境界にして高遠に至っている。北側には最終的には諏訪に至る古道が山麓線上に開削されている。城郭内に御射山社が祀られており、この古道を往復して諏訪神社信仰が布教されたことは事実であろう。

本城郭は標高約８００ｍ～８４０ｍの範囲内に含まれ、伊那の豪族笠原氏の本拠地であり、赤石山脈の前山である伊那山脈の一峰守屋山の西麓に、やや緩斜面を巧みに利用して構築した根小屋的要素を多く有している山城の一種に属している。南北約６０ｍ、東西２５０ｍの規模を持ち、東西に細長い築城方式を導入している。七～八段のヒナ段状の郭を持ち、本郭（南北３８ｍ、東西７５ｍ程の規模）には広い範囲の平坦部が設置されている。この平坦部の東端には高さ約５ｍ～６ｍ程を盛土した土塁状遺構が南北に存在し、この遺構の東側直下をＶ字形状に深く掘削してある。ヒナ段状郭の配置は最下段から二の郭にかけてほぼ直線状に走り、本郭に至って、やや北側へ角度を曲げる。

要所、要所となる郭の縁に接するように堀が設けられ、防御上に工夫を凝らしている。二の郭には御射山神社前宮が、前宮から東方へ８００ｍ程行った山麓の一隅に御射山神社奥宮の石祠が荘厳なたたずまいとともに座している。昭和２５年（１９５０）旧御射山社

焼失により、御射山社殿造宮が実施され、その際に、礎石、青磁片、薬研掘状石臼が出土。特に、青磁片の細かな再調査が必要である。なぜならば、宋青磁か明青磁かによって時代決定が可能となるからであり、これにより城郭の成立年代が明らかになってくるからである。礎石は約１ｍの間隔で整然と配置された建物の存在が実証でき得よう。

蟻塚城跡遺跡の南西約１km離れた位置に天神山が聳え立ち、山頂に天神山城が築かれている。山頂は平坦で、若干の土盛り跡、浅い堀跡を認める山城である。『高遠実記』に「治承４年９月武田信義及び一條次郎忠頼が伊那谷侵攻時にこの城郭を攻めている」こと



第10図　蟻塚城跡遺跡実測図（１：2,000）　『伊那市史　歴史編』を加工
●は調査地点

を記している。蟻塚城の裏山には守屋山城が、前面には天神山城が存在し、距離的に見て三つの城は一大城郭群を形成していたと推測され、その中心的役割を果たしたのが蟻塚城である。この城郭群を形成している地域内には御射山入沢、中の条（城）、阿弥陀林、五りん林、坊門、山伏塚、馬場、馬場堤、古屋敷、屋敷添、門田、馬場ヲリ、前田、門前、北垣外、南垣外、仏堂、矢口、縄手、縄手通り、丸垣外、築地、原町、深町、竹原、高見、七日市場、一日市場と中世的色彩の濃厚な小字名が数多く現存し、昔を思い出させてくれる。

蟻塚城の築城時期は、本郭の背後に高い土塁が築かれていること、また、ヒナ段状遺構を兼備していることの両面から見て、想像するに１４～１５世紀の室町時代前期頃に編年づけが可能であろう。

笠原という名の文献上での初見は平安時代に編纂された『延喜式』に現れる信濃１６牧の一つであり、時代は下って鎌倉時代に編纂された有名な歴史書『吾妻鏡』の中に信濃２８牧の一つに伊那の「笠原牧」の存在が明確である。『吾妻鏡』の冒頭に「笠原平五頼直」なる武将が出現する。「市原の合戦」で彼は木曽義仲に敗北し、その後の動向が事細かに記述されている。最近の研究姿勢は平五の動きから見て、伊那の人ではなかったと考えられつつある。

室町時代に書かれた文献を考えると『大塔軍記』には応永７年（１４００年）、大塔合戦で小笠原長秀に従軍した伊那衆の中に「笠原中務亟」なる人物が登場し、『守矢満実書留』の中には応仁元年（１４６７年）正月一日の記事に「笠原美濃貞政」なる人物が、文明１４年（１４８２年）に高遠継宗と諏訪政満との合戦で笠原氏が継宗に味方したことが、それぞれ分かる。

伊那市史跡に指定され、伊那市を代表する数多くの城郭の一つにあげられ、それとともに出土遺物が脚光を浴びだしている。

今回、笠原区内でこの蟻塚城跡遺跡の保存・活用に向けた「蟻塚城跡保存会」が発足し、その存在を広く知ってもらおうと標識の設置が計画され、それにともない試掘調査を実施した。２．８ｍ×２．０ｍの狭い範囲であるため、全面的に表土剥ぎを実施し、遺構・遺物の有無を確認した。

９　調査の成果

６㎡に満たない狭い範囲の試掘であり、また、木の根等により調査は非常に困難であった。遺構は検出されなかったが、狭い範囲の中でわずかではあるが遺物が出土した。

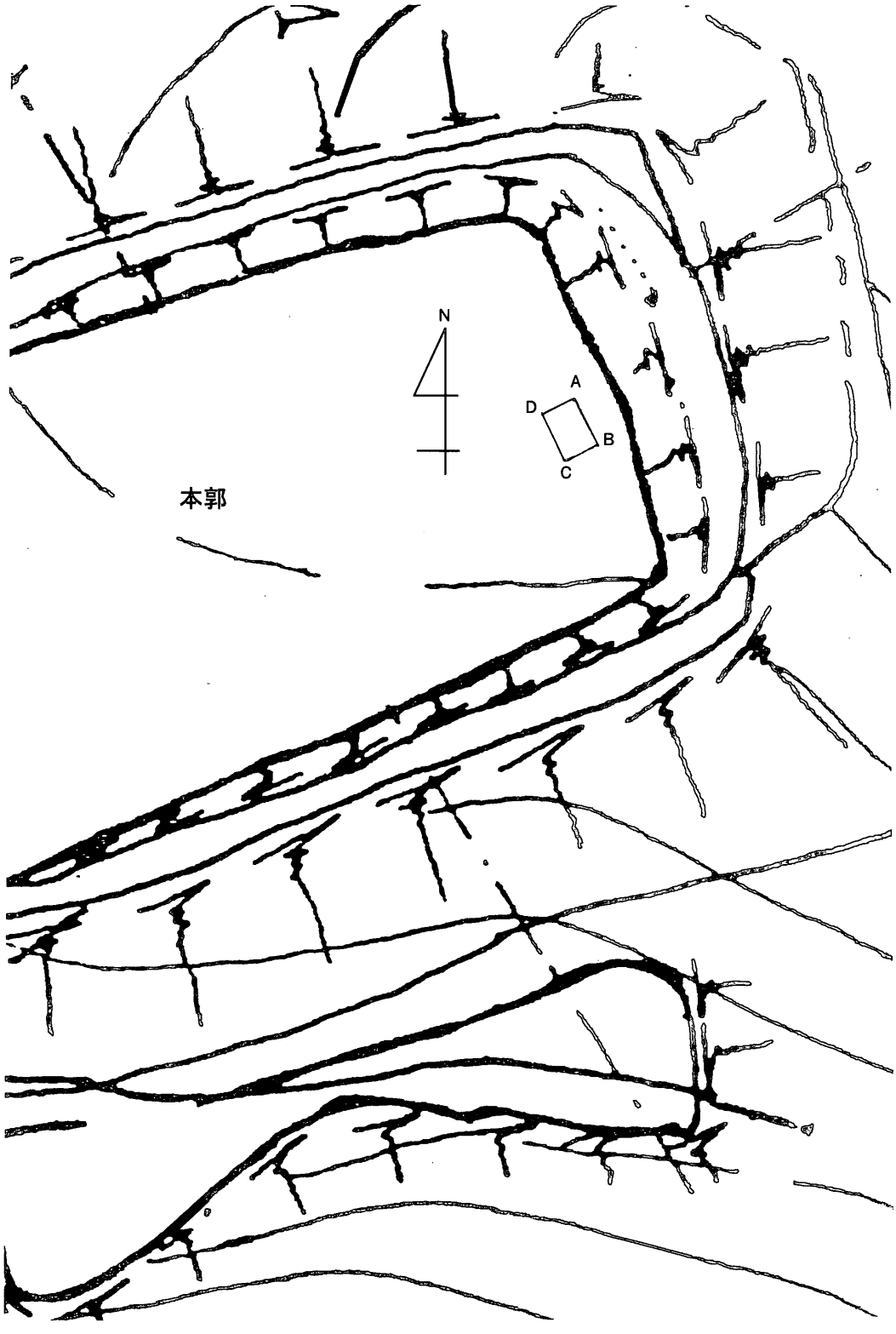
図版の遺物①は平縁口縁のほんの一部分であり、口縁の分厚い点、赤みがかった色調からみて戦国期の常滑焼の大甕であろう。

図版の遺物②は江戸時代の灰釉茶碗であり、釉は薄く施されており、貫入も多く見受けられる。

図版の遺物③は江戸時代の作りで分厚く長石釉が施され、ピカピカ光沢を放っている。

図版の遺物④は中世の所産で、火打金とセットになっているのが通例であり、双方が一緒に出土する場合も見受けられるが、今回は片方だけであった。

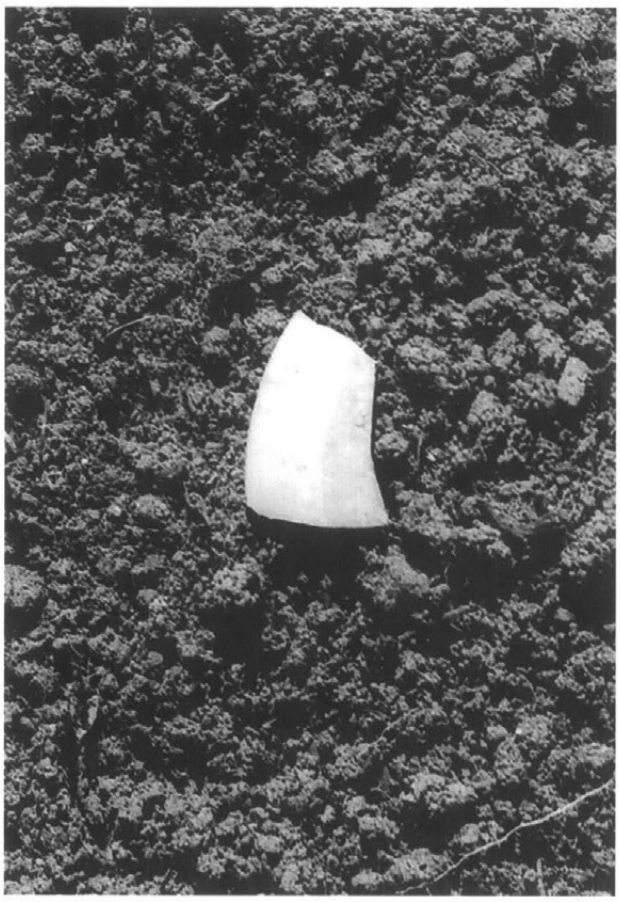
今回の調査では、遺構の検出は無かったものの、わずかではあるが戦国期から近世に至る遺物の出土があり、これからの蟻塚城跡の研究に貴重なデータを提供することとなった。



第11図　発掘調査概要図（1：500）『伊那市史　歴史編』を加工

遺物①　陶器出土状況

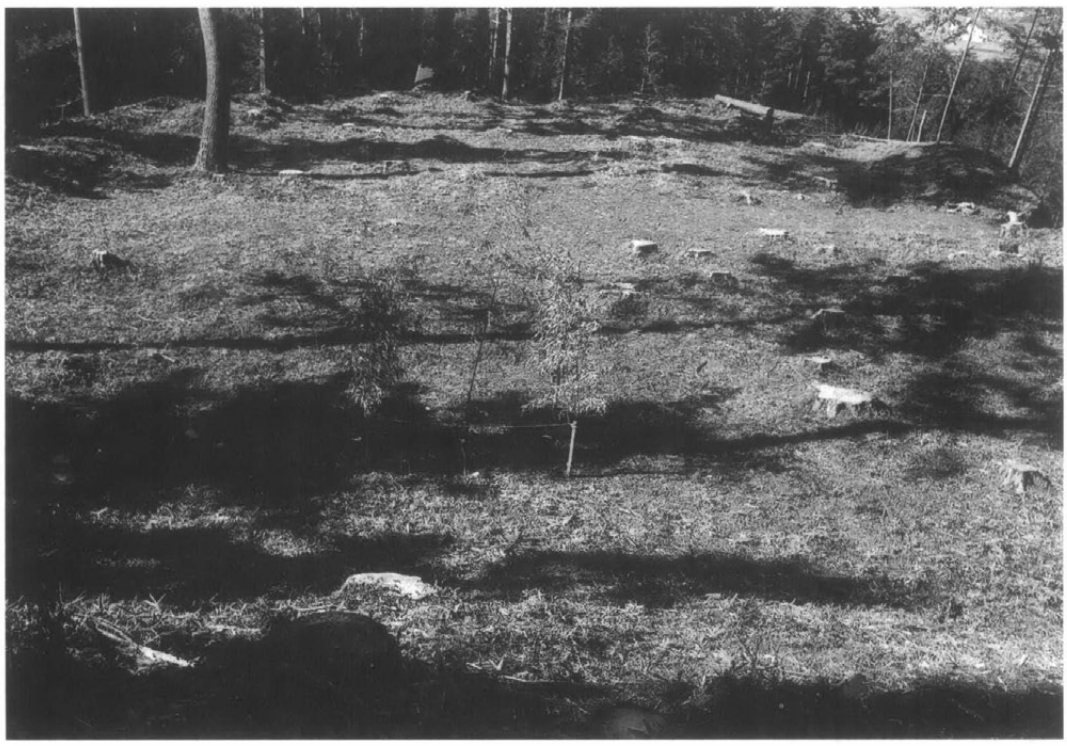
遺物②　陶器出土状況



遺物③　陶器出土状況

遺物④　火打石出土状況

本郭東側の状況



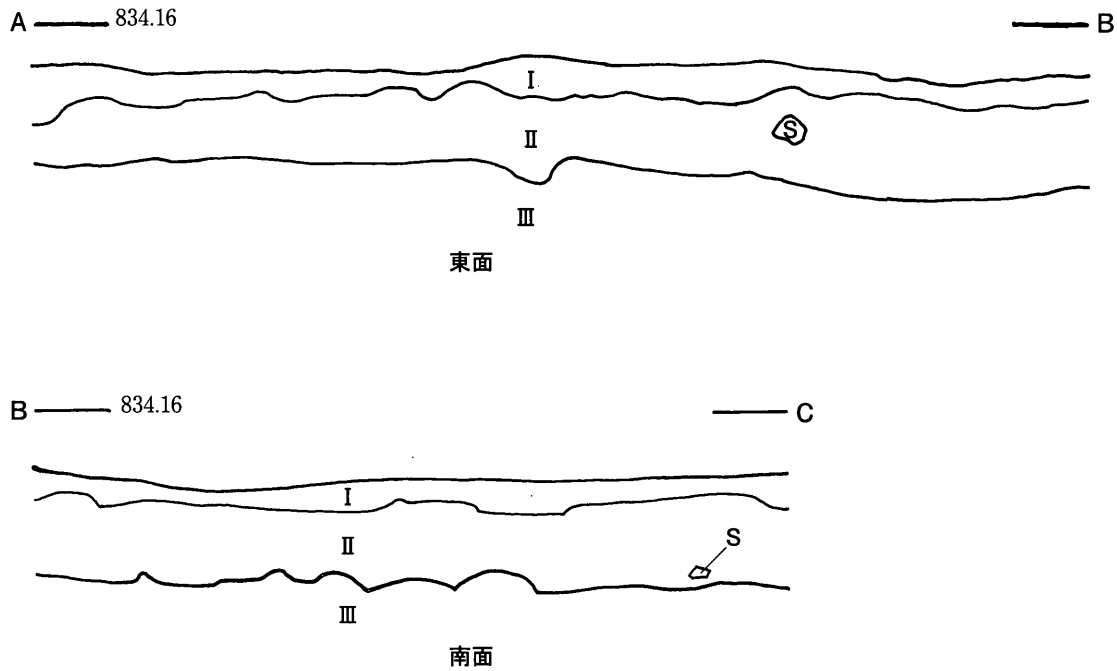
本郭内部の状況

本郭南側土塁の状況

本郭北側土塁の状況

発掘風景

完掘状況



Ⅰ　黒褐色土：落ち葉等の堆積による。ボロボロと崩れ易い。(2.5Y3/1)

Ⅱ　茶褐色土：水分を含んでおり粘土の様に粘る。根の貫入により黒褐色土が混じる。(10YR3/3)

Ⅲ　黄褐色土：砂岩に近い性質。水分を多く含んでいるため、やや粘る。(2.5Y6/3)

第12図　土層断面図（1：20）
（各地点は第11図参照）

Ⅳ　地神原遺跡（じしんばら）

1　所 在 地　　伊那市手良野口１８５７番地１ほか

2　調査期間　　平成２１年（２００９）　１２月２４日～２８日

3　調査面積　　４１６．４㎡

4　調査原因　　宅地造成

5　調査担当　　飯塚政美

6　検出遺構　　平安時代前期遺構（詳細不明）

7　出土遺物　　平安時代前期土師器片

8　遺跡の環境と調査にいたる経緯

本遺跡は長野県伊那市手良野口の最南端地域に該当する。遺跡地までの道順は伊那市街地より東へ杖突街道を高遠方面へ向って５km程行くと、近年、住宅化が急激に増している美篶上原集落に達する。上原集落と次の上大島集落の境界付近で「杖突街道」に別れ、左折して北へ向うと、すぐ左側に美篶小学校があり、このようなことが発端となって、美篶地区の中心地となっている。小学校のすぐ北側は三峰川の右岸第二段丘が東西に走向しており、この段丘崖は見事な礫層やテフラ層が層序の整った形態で堆積しており、一見することも必要であろう。

段丘斜面の林を登り切れば広々としてほぼ平坦地が連続しており、この平坦地は、以前は畑地や森林地帯が主流であり、水田地帯はほんのわずかな面積を占めているに過ぎなかった。

ところが、昭和３０年代に三峰川総合開発事業が具体化し引水して、現在は水田化が広い面積にわたって及んでいる。前述した平坦の段丘面一帯は伊那市美篶末広集落で、伊那市内でも有名な農村地域が展開している。この末広集落を通過し、杖突街道と別れてから２．５km程北へ行くと、手良中坪に入る最初の所で「若宮八幡社」に当たり、この地点で左折して西へ向って、約１km進み、この地点で県道美篶箕輪線と分かれ左折して細い道を南へ入っていくと、約１０ａ程の畑が展開している。この周辺一帯が「地神原」遺跡であり、これは美篶の笠原にある「天神山」と、「地神」「天神」と一対になっている とのことで有名である。

伊那市の含まれている通称伊那谷は西側で木曽山脈（通称中央アルプス）、東側で赤石山脈（通称南アルプス）加えて赤石山脈の前山である伊那山脈とに挟まれ、それらの間を天竜川が流れる所謂縦谷状地形を形成している。微地形として天竜川の両岸には、東流、あるいは西流する天竜川の多くの支流が存在し、堆積、運搬、浸食の三大作用を行い、大小さまざまな扇状地、河岸段丘、渓谷を形造している。このような様相は伊那市付近でも反復している。

遺跡地付近は伊那山脈の花崗岩を基盤となし、その上に棚沢川、滝ノ沢川によって形成された丘陵地で、南東に傾斜し、北東には殆ど傾斜をもたない丘陵地である。テフラ層は古期テフラ、中期テフラ、新規テフラの区分が明確であり、地質研究場所としては絶好の所である。伊那谷の形成している河岸段丘は、古い方から、塩嶺面、高尾（Ⅰ，Ⅱ）、大泉面、神子柴面（Ⅰ，Ⅱ）、南殿面、木ノ下面（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）が発達しており、これらの中にサンドウィッチ状に浮石層が存在する。浮石層はそれぞれ異なった特色があり、テフラ層の年代研究には絶好の資料である。

伊那市東部における天竜川左岸は、天竜川による河成段丘と、三峰川と棚沢川とによる合流した扇状地から成り立ち、その上を厚いテフラ層が覆っている。この段丘平面はほぼ三角形状をした地形とみることができ、まずその東西辺は三峰川により開析された一辺で、美篶天神山（８０８ｍ）から伊那公園まで約５．７㎞、南北辺は天竜川による河成段丘で、伊那公園から箕輪町卯ノ木付近まで約５．５㎞、また天神山と卯ノ木を結ぶ線は、伊那山脈山麓で約５．５㎞の一辺を受持っている。この三角状台地の遺跡分布をみると、まず三峰川と天竜川の段丘上、そして伊那山脈山麓で、この三角地帯台地の三辺に当たる部分と、その垂線ともいうべき棚沢川周辺に濃密な遺跡の点列分布帯をみることができる。また標高は天竜川にのぞむ段丘上、６９０ｍ台に、弥生時代から平安時代頃までの遺跡、それは爪ヶ崎、上牧神社上（押型文）、長者屋敷、上牧、福島等の大遺跡が隣接し、また４０基近い牧、福島古墳群がこの一辺に集中している。さらに７２０ｍから７９０ｍの間が、伊那山脈山麓分布地域で、手良に点在する大半の遺跡はこの中に入る。これらの遺跡を包合するほぼ平坦なこの三角状台地は通称「六道原」と呼ばれ、古来より美篶地区の一部に六道地蔵尊が祀られている。手良の地名が歴史上に登場するのは伊那地方では最も古く、平安時代承平５年（９３５年）「倭名類聚鈔」に「弓良郷」が初見され、また手良の地名についても、古来より「手良公（てらのきみ）」と称する帰化人が居住していたと伝えられており、それを裏付けるごとく当遺跡北に流れる滝の沢川の上流には、「大百済毛（おおくだらげ）」「小百済毛（こくだらげ）」と呼ばれる二つの地名が残っている。手良に散在する遺跡数は、約５０数か所に達するが、その殆んどが棚沢川による扇状地地形上に存在する。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（１，４５５ｍ）に源を発し、全長約９㎞をもって福島部落にて天竜川に合流する。その間、この扇状地は山麓特有の湧水による微開析により、湿地帯凹地面と舌状丘陵面とを数多く形成し、この舌状丘陵は絶好な居住性に富み、先史・原史はもとより、古代高地性農耕文化としての村落形成にも理想的な地形である。浜弓場遺跡もその地形的条件を備えた好例の一つである。手良における縄文早期遺跡としては、浜弓場の他、所洞、ワランベ、松太郎窪の三遺跡が上げられ、伊那山地山麓を北に辿れば、箕輪町卯ノ木に上金、澄心寺下、同三日町に栗飯、城近、萱野と押型文遺跡が続き、南に下れば、三峰川を越え北福地の三ツ木があり、さらに田原駒形、宮ノ上と点在していく。また手良付近における注目すべき遺跡とし

ては、縄文中期主体の所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎窪等が見られ、縄文晩期には火葬墓とみられる野口遺跡が存在する。また南垣外では灰釉長頸瓶と人骨が出たと伝えられており、さらにこの南垣外から棚沢川に沿って、福島地籍まで約１．５kmの広大な面は、弓良郷の所在地として注目されている福島遺跡が続く。なお笠原堂垣外遺跡からは、古式土師器の良好なセットと住居址が露呈し、また古墳としては矢

第13図　位置及び遺跡分布図

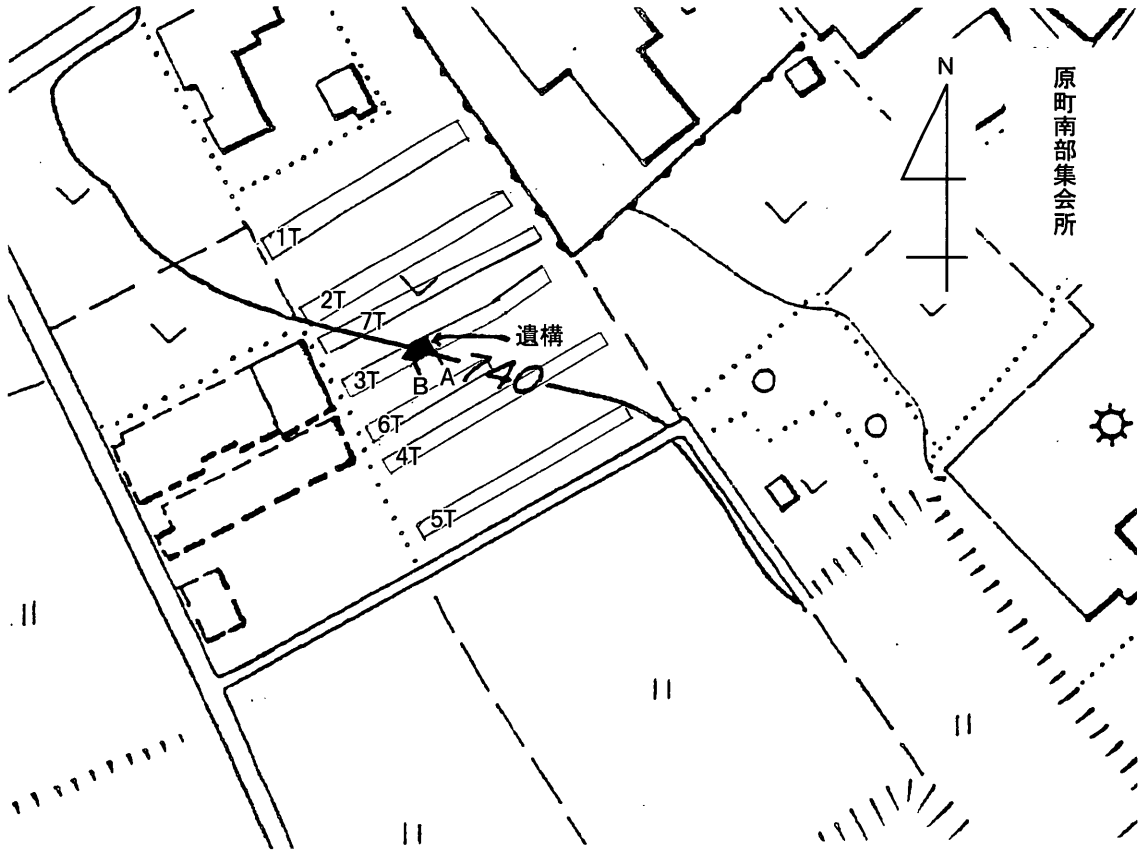
遺 跡 の 名 称

①沢　山	⑩矢　塚	⑲東　松	小百済毛	㊱六道原	㊹辻西幅	㊷林　越
②ヨキトギ	⑪野口畑	⑳古八幡	㉘近　洞	㊲野　口	㊺島　崎	㊸菅　窪
③蟹沢桜林	⑫金　山	㉑鍛冶垣外	㉙上　村	㊳下手良中	㊻堤　林	㊹富士塚
④ワランベ	⑬竜の沢	㉒中　原	㉚社宮地原		㊼山の田	㊺古屋敷
⑤入　林	⑭鳴　神	㉓石見堂	㉛宮の平	㊴大　原	㊽神手原	㊻城　山
⑥大　上	⑮山伏塚	㉔二十平	㉜砂　場	㊵松太郎窪	㊾日向畑	㊼浜弓場
⑦狐垣外	⑯丸　山	**㉕地神原**	㉝清水洞	㊶南垣外	㊿笠原堂垣	
⑧鳥ノ宮	⑰向　田	㉖小萩原	㉞郷の坪	㊷角　城	外	
⑨辻垣外	⑱堂垣外	㉗大百済毛	㉟柿の木	㊸垣　外	㊺堤　下	

塚、山伏塚の二基が近くに存したが、共に現在は消滅した。特に山伏塚については、戦前までその付近から出土した石棒や石製品を８～９本立てて、雁高大明神として祀り、またその道の病を得た物が治癒すると、幟や石製品を奉納し、かなりの信仰を集めたと伝えられている。現在は水田となり、石製品の一部と雁高大明神の碑が本郷千春氏宅に祀られている。また浜弓場遺跡南の貯水用堤を造った時、夥しい人骨がその湿地より出土したと伝えられている。

（註）本原稿は『浜弓場遺跡調査報告書』を引用

この遺跡の南西部において宅地造成の開発計画があり、事前に試掘・確認調査を実施した。造成予定地の東西方向に７本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。「地神原（じしんばら）」と呼称され、当地の東側正面に「天神山」がどっしりと鎮座している。このことは歴史的変遷より「地の神」と「天の神」とが一対になって祀られていることの証拠であり、古代の「弓良郷」の存在性を裏付け、また当初より現況が畑等々の諸条件より、遺跡の存在密度は極めて高く、大いに期待を持って試掘調査に取りかかった。

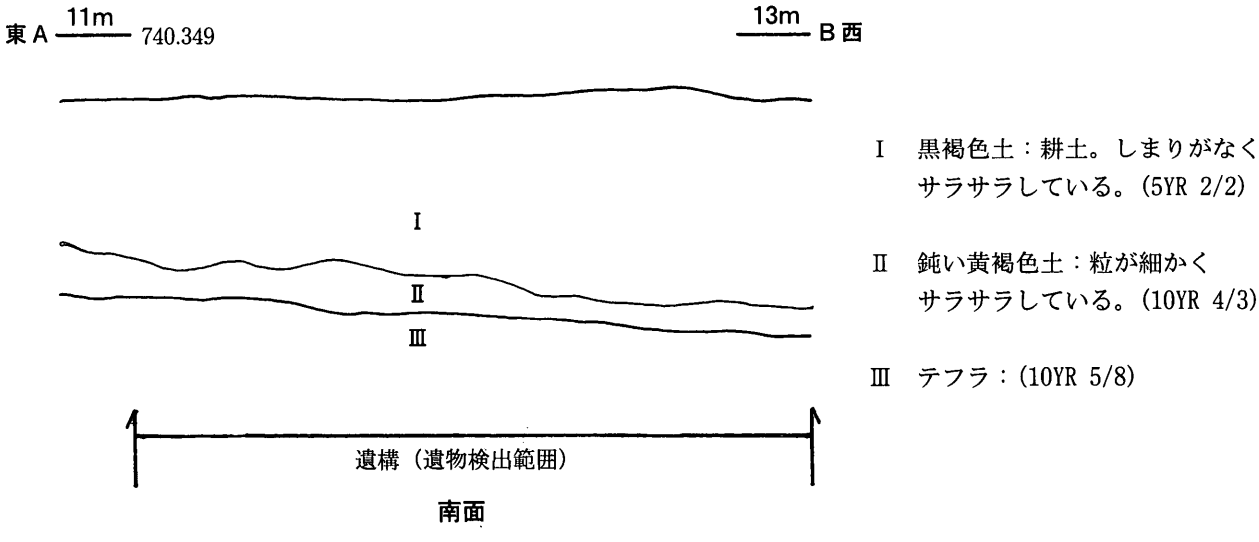


第14図　発掘調査概要図（1：1,000）

9　調査の成果

調査を実施したところ、土層自体は安定し、後世の手は入っていなかった。７本のトレンチを東西に長く掘ってみるに、第３号トレンチの中心部付近から平安時代前期の土師器がほんのわずかに出土した。それに伴い、遺構と思われる落ち込みが確認されたが、事業主との協議の結果、造成が盛土にて整地され、掘削を伴わない箇所となることを確認。遺構の破壊は免れることになり、遺構保護の措置を施して埋め戻し、遺構の保存を図ることができた。この土師器の時期より「弓良郷」の存在が裏付けできた。「弓良郷」と言っても、かなり広い範囲をさしており、今回のように集落址の空間部的な場所が確認されても不思議ではない。

以前に、今回試掘調査した付近を開田したところ平安時代の「土師器が多量に出土した」と地元の住民達は語っており、もう少し広範囲の調査を実施したならば、何かの遺構の存在が確認できたことは相違ないと思われる。今回は期待していた程に成果を得られなかったが、かつての「弓良郷」の存在、位置が点ではあるが少しずつ分かってきている。今までに「弓良郷」の位置および意義づけに大いに役立っている遺跡と出土遺物について触れておく。平成６年度発掘の辻西幅遺跡（手良下手良所在）出土の「王」字の墨書土器６点、平成１２年夏発掘調査を行った下手良中原遺跡からは「和同開珎」が１枚出土しており、古代「弓良郷」の存在を強調してくれる。手良及びその周辺にある遺跡が点から点でも結構であるが、如何なる場合でも試掘調査を実施すべきで、このことを積み重ねていけば、より意味深い「弓良郷」の意義付けが明確化し、伊那市周辺の古代の郷の実態が把握できるであろう。



第15図　第３号トレンチ土層断面図（部分1：20）
（各地点は第14図を参照）

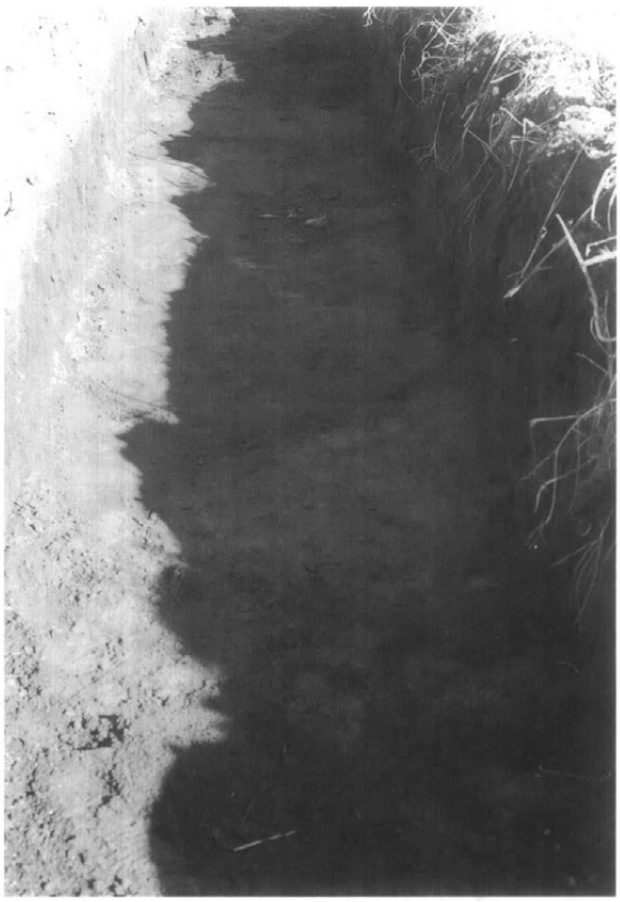
調査前　全景

調査風景

第１号トレンチ

第２号トレンチ

第３号トレンチ



第３号トレンチ　遺構付近

第４号トレンチ

第５号トレンチ

第６号トレンチ

第７号トレンチ

Ⅴ　伊那養護学校遺跡

1　所 在 地　　伊那市西箕輪３９００番地１３０

2　調査期間　　平成２２年（２０１０）　１月２２日～２月１日

3　調査面積　　４８㎡

4　調査原因　　教室棟建設

5　調査担当　　飯塚政美

6　検出遺構　　なし

7　出土遺物　　なし

8　遺跡の環境と調査にいたる経緯

伊那養護学校遺跡は長野県伊那市西箕輪３９００番地１３０の周辺一帯にあり、この位置は木曽山脈（別称中央アルプス）の北端部分にある経ヶ岳山麓に源を持ち、この流れの途中に存在する数多くの湧水を集めて県の一級河川である大清水川を形成し、最終的に天竜川に注ぎ込む支流となっている。この川も一旦大雨が降れば、増水が激しく、荒れ川と変ぼうする。その証拠として、しっかりした堤防と石垣が築かれていることから分かる。普段はほとんど水がないような状態である。

河川の両側は現況では畑、山林は大部分が松林となっている。天竜川の近くは多くの湧水があるので、水田に利用されている。

次に、伊那養護学校遺跡に至るまでの経路を述べてみよう。

ＪＲ飯田線伊那市駅を降車して、西方へ向って、市道大萱・荒井線を西方へ５㎞程遡ると左手に信州大学農学部の農場と校舎が大きな面積を占めている。この辺は伊那市と南箕輪村とが複雑な境界地になっており、先に述べた信州大学のある周辺は南箕輪村に該当している。

この信州大学の道を隔てた北側に大きな集落が展開しており、この一帯は伊那市西箕輪大萱に含まれている。

信州大学校門のある位置の前に信号機があり、それを通って西側へ５００ｍ程行くと、大規模農道へとぶつかる。それを渡って、さらに西へ１㎞程行くと、この地区に西箕輪の中心地である上伊那農協西箕輪支所、伊那市西箕輪公民館、伊那市立西箕輪小学校、同中学校の建物が棟を近くして建っている。この地点は五差路になって、これに至ったところで右折して北へ１㎞程行くと、右手に「伊那養護学校」の誰でも分かる大きな表札がある。

今回、学校敷地北西側の一角に、新たに教室棟を建築する計画があり、昭和４０年代前半に、敷地内の教員住宅建築の際、旧石器時代の石核が発見された記録から、今回の試掘調査となった。予定地に１２か所のグリッドを設け、表土を重機にて除去し、人力にて掘り下げていった。

この遺跡の地形・地質について述べる。木曽山脈（別称中央アルプス）と赤石山脈（別称南アルプス）、その前山である伊那山脈との間に開析した伊那谷は盆地状地形を呈し、中央部の最も低いところを諏訪湖を水源とする天竜川が貫流し、縦谷状地形を呈している。天竜川は南アルプス、伊那山脈、中央アルプスより流れ出す多くの支流が堆積、浸食、運搬作用を何度も繰り返しながら天竜川を通って太平洋へと注ぎ込んでいる。

これらの作用を行っていく段階で、数段にわたる河岸段丘や複合扇状地を造り出し、この状態について『長野県上伊那誌　第一巻　自然篇』によれば次のように記されている。「竜西地区は上から丸山段丘、神戸段丘、大泉段丘、神子柴段丘、南殿段丘、低位段丘、竜東地区は上から荒神山段丘、手良段丘、六道原段丘、卯ノ木段丘、福島段丘、低位段丘である。」

伊那養護学校遺跡は大清水川の両岸に開がっており、存在する標高は８１４ｍ～８２４ｍの範囲内に含まれており、普段は水量が極めて少ない。この河川の比高は３ｍ～５ｍ程を測り河岸段丘として浅い方に属している。遺跡地付近は現在のところ、全くといってよい程に湧水は不足しており、大萱集落の飲料水は経ヶ岳の扇頂部分一帯より引き水してきたのであろう。

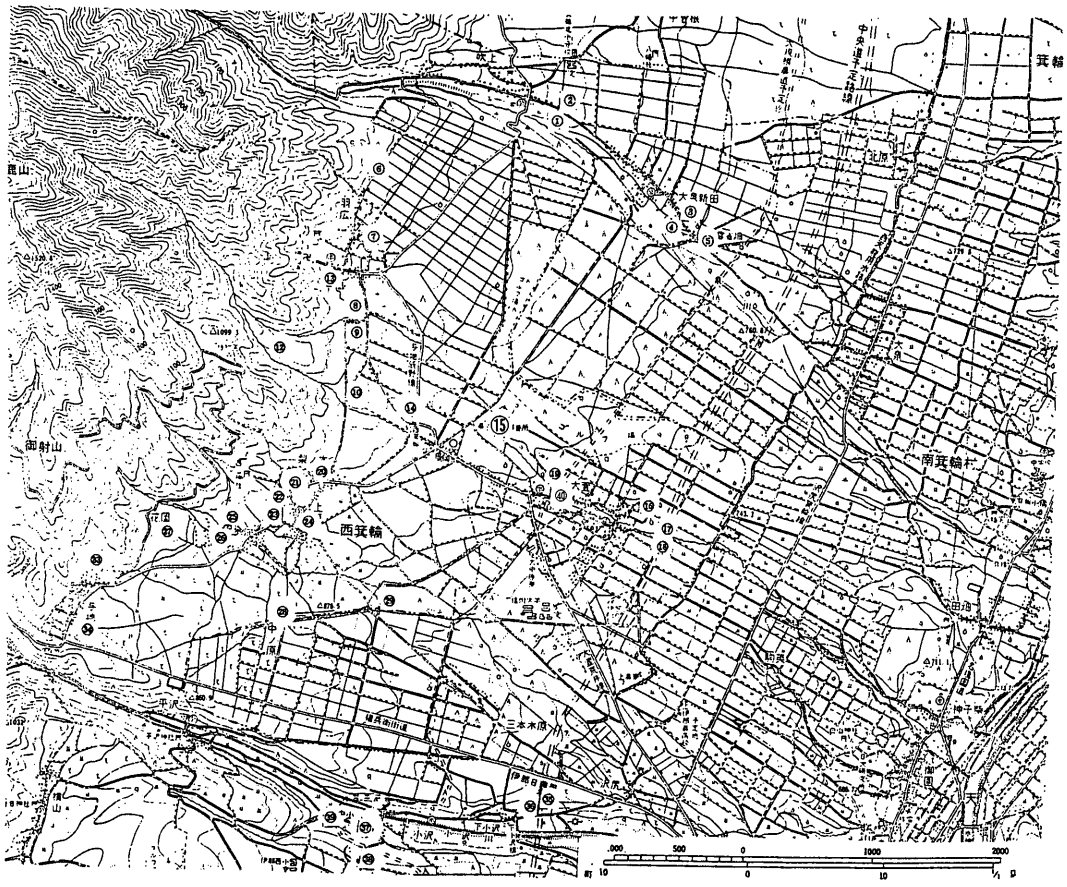
従って、大萱地籍内での大きな遺跡の存在性は極めて低いと思われる。遺跡地は大泉段丘面に該当し、上部鮮新世の塩嶺礫層が基盤となり、その上に大泉礫層を覆せ、さらにその上に御岳火山による「信州テフラ層」が数ｍにもわたって推積している。

試掘調査の際に確認したグリットの状況を述べる。建設予定地のうち、既に駐車場となっていた部分については、南に傾斜している地籍のため、砕石および撹乱された礫を多量に含む土砂で埋め立てられており、その下に黒褐色土・暗褐色土が存在していた。テフラ層については、部分的に礫を多く含む層があり、場所によっては、砂礫のみで構成されている層も確認された。

西箕輪地区の遺跡は４０か所発見されており、それらの分布状態を概観すると４種類に大別できる。表示の仕方は第１６図の番号と文章中番号は同一であることを記しておく。天竜川の支流で、西箕輪地区の北の境界、段丘面に沿って位置している遺跡（第１６図１～５）、大清水川付近に分布している遺跡（第１６図１４～１９、４０）、経ヶ岳山麓より広く展開している扇状地の扇頂から扇側部に位置している遺跡（第１６図６～１３、２０～３４）、小沢川の河岸段丘面に分布している遺跡（第１６図３５～３９）である。全般的な分布状況を概観してみると、伊那谷全般に共通するが、山岳部の終局、盆底地形に移行する山麓線、所謂扇頂から扇側部に該当する位置に遺跡が連続して帯状に分布し、扇央部が希薄で、扇端部は濃密になる傾向が著しい。

天竜川を眺む段丘には濃厚な遺跡群が認められており、開析しながら天竜川に注ぐ各支流及びそれの付近には幾つかの遺跡がある。

各々の遺跡の詳細なことについては第１６図を参照すること。４０か所中の内訳は旧石器を出すのも４、縄文前期１、縄文中期２９、縄文後期５、縄文晩期１、弥生後期３、土師器を出すものを１５、須恵器を出すもの１２、灰釉陶器を出すもの７遺跡となる。



第16図　位置及び遺跡分布図

遺跡の名称

①中道南	⑨金鋳場	⑰富士塚	㉕富士垣外	㉝与地山寺
②桜　畑	⑩上　溝	⑱在　家	㉖堀の内	㉞与地原
③久保田	⑪財　木	⑲大萱西	㉗小花岡	㉟月見松
④塚　畑	⑫蔵鹿山麓	⑳殿屋敷	㉘中の原	㊱月見松経塚
⑤高　根	⑬経ヶ岳山麓	㉑宮垣外	㉙下の原	㊲小沢神社
⑥北　割	⑭西箕輪小学校北	㉒天庄１	㉚溝　畑	㊳小沢原
⑦田　代	⑮伊那養護学校	㉓天庄２	㉛上の原	㊴穴　沢
⑧古屋敷	⑯熊野神社	㉔上　戸	㉜堂　洞	㊵大　萱

9　調査の成果

試掘調査に直面して、幾つもの問題が考えられた。問題の対象となるのは遺跡に直接的に関連性のある「大清水川」の動向である。まず第一として大清水川が荒れ川であり、かつ、また比高が低く、一度、長雨が続けば段丘上面にまで浸水してくる危険性を常に抱いていたこと。第二として複合扇状地の湧水分布は一般的に扇頂部、扇側部、扇端部に集中していると考えられている。

遺跡分布を西箕輪地区に限定してみると、与地、中条、上戸、羽広にわたる山麓地帯、これはいわば扇頂部や扇側部に該当し、この位置は湧水個所が多く、遺跡の密集地にあてはまる。要するに、水は人間生活に絶対に必要な条件で、人間生活イコール水という、欠如できない、いわば公式的なことが成り立つ。以上のことについて人文地理学者ブラーシュの提唱した説「湧水のある所には必ず集落が存在する」と一致する。

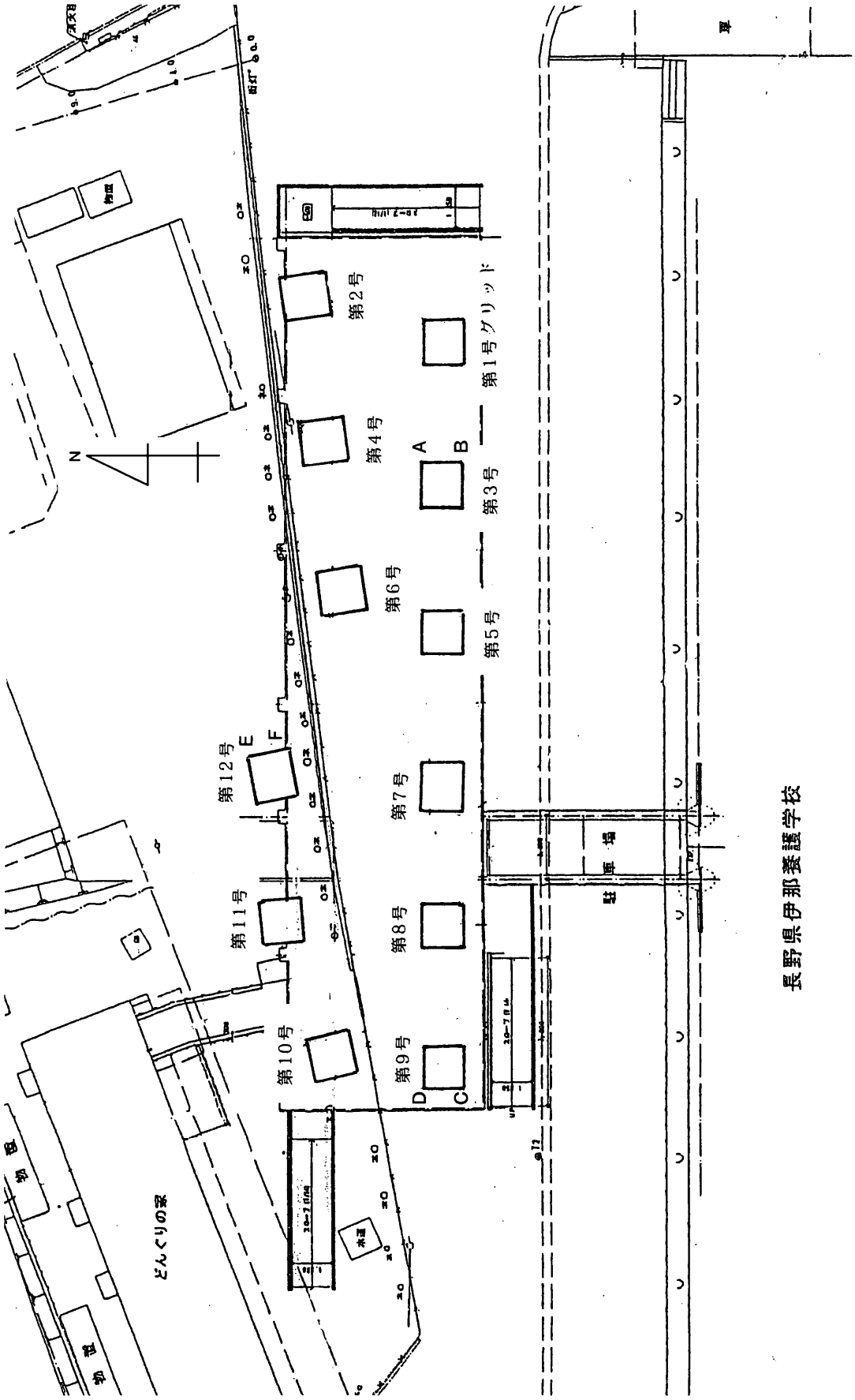
今回の試掘調査で遺構は１か所も発見できなかった。その理由は大清水川が常に水があったかどうかであろう。遺構と同じように遺物も出土しなかった。これも大清水川に全面的に左右されたのであろう。

以上、今回の試掘調査において、考古学的な見地からの収穫は無に近かったが、しかし、先史地理学的な立場からは多くの問題点を投げかけてくれた面では誠に有意義であった。

最後に、調査にあたり長野県伊那養護学校から多大なるご協力をいただいたことを記して感謝申し上げる。

調査風景

調査風景

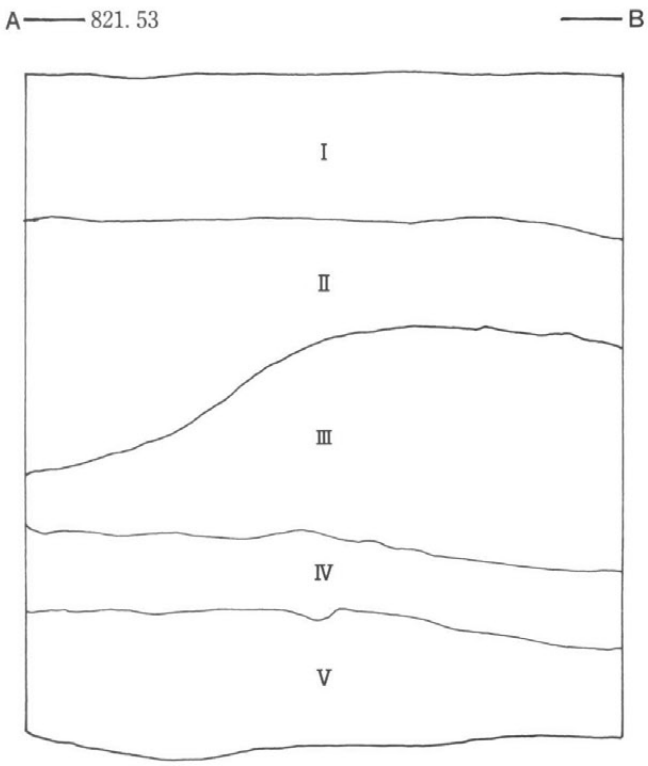


第17図　発掘調査概要図（1：300）

調査前　全景

学校敷地の北西を流れる大清水川（上流から下流をのぞむ）

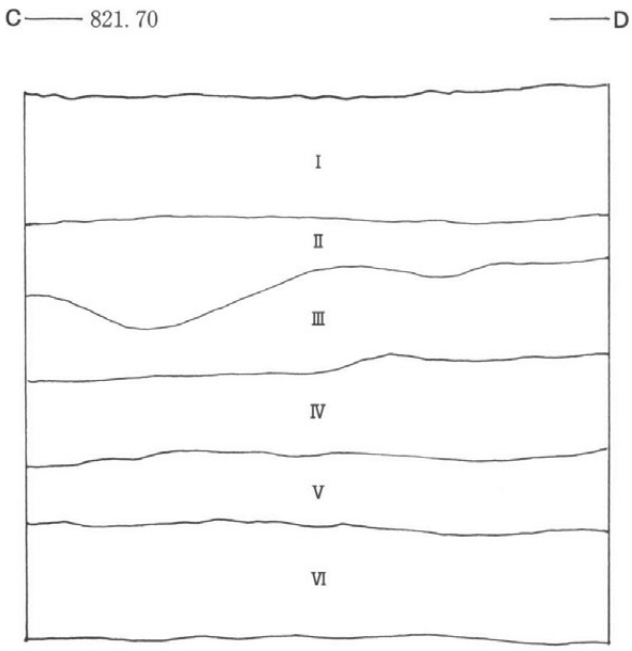
第３号グリッド



Ⅰ　砕　　石
Ⅱ　カクラン土：埋土。暗褐色土、礫、ゴミが混ざっている。非常に固くしまる。(2.5Y 5/3)
Ⅲ　暗 褐 色 土：礫を多く含む。しまりはない。(10YR 3/3)
Ⅳ　黒　色　土：礫を少量含む。固くしまる。(10YR 3/3)
Ⅴ　テ　フ　ラ：軟らかいが水分を多く含み、やや粘土質。ごくわずかに礫を含む。(2.5Y 6/6)

第18図　第３号グリッド土層断面図（1：40）
（各地点は第17図を参照）

第９号グリッド



Ⅰ　砕　　石

Ⅱ　カクラン土：埋土。固くしまる。砂礫と暗褐色土を含む。（黒色土は10YR 2/1）

Ⅲ　黒 褐 色 土：砂礫を少量含む。固くしまる。（5YR 2/2）

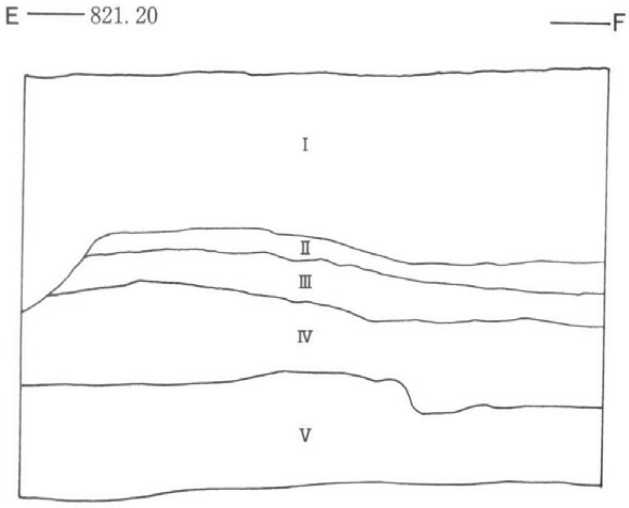
Ⅳ　テ　フ　ラ：砂礫をごく僅かに含む。粘りがあり粘土質。（2.5Y 6/8）

Ⅴ　砂礫混じりテフラ：砂礫を40％程含む。粘りが強く粘土質。（5Y 5/4）

Ⅵ　テ　フ　ラ：粘りが強く粘土質。（5Y 5/4）

第19図　第９号グリッド土層断面図（1：40）
（各地点は第17図を参照）

第12号グリッド



Ⅰ　カクラン土：埋土。黒色土、褐色土、礫から成る。ゴミの混入あり。（10YR 2/2）

Ⅱ　黒　色　土：礫がやや混じり、固くしまる。（7.5YR 1.7/1）

Ⅲ　黒 褐 色 土：礫は少ない。固くしまる。（7.5YR 3/2）

Ⅳ　テ　フ　ラ：水分多く、粘土質。（2.5Y 5/4）

Ⅴ　砂礫混じりテフラ：砂礫を多く含む。（2.5Y 5/3）

第20図　第12号グリッド土層断面図（1：40）
（各地点は第17図を参照）

参考文献・引用文献

Ⅰ　北丘Ｃ遺跡

1　『南丘Ｃ遺跡　－緊急発掘調査報告書－』1980年12月
　長野県伊那市教育委員会

Ⅱ　堀遺跡

1　『勝間一堀遺跡　縄文中期大集石群遺構』1982年3月
　長野県上伊那郡高遠町教育委員会

2　『勝間一堀遺跡　埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』2002年3月
　社会福祉法人　高遠さくら福祉会　　高遠町教育委員会

Ⅲ　蟻塚城跡遺跡

1　『富岡遺跡　埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査概報』1999年3月
　長野県伊那市教育委員会

2　『伊那市史　歴史編』1984年9月
　伊那市史編纂委員会

3　『定本　伊那谷の城』1996年3月
　株式会社郷土出版社

Ⅳ　地神原遺跡

1　『砂場遺跡　－緊急発掘調査報告書－』1978年3月
　長野県伊那市教育委員会

Ⅴ　伊那養護学校遺跡

1　『大萱遺跡緊急発掘調査報告書』1973年3月
　伊那市教育委員会

2　『長野県上伊那誌　第一巻　自然篇』1962年5月
　上伊那誌編纂会

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡発掘調査報告書
副書名	平成21年度長野県伊那市内遺跡試掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	伊那市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第２集
編著者名	丸山　敞一郎　　飯塚　政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617　長野県伊那市下新田3050番地　　TEL0265-78-4111
発行年月日	西暦2010年3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
北丘C（きたおか）	伊那市東春近木裏原（いなし ひがしはるちか きうらはら）	20209	121	35° 48′ 23″	137° 55′ 51″	2009 5.28～5.29	125	展示施設の建設に係る事前調査
堀（ほり）	伊那市高遠町勝間（いなし たかとおまち かつま）	20209	389	35° 49′ 20″	138° 4′ 10″	2009 7.30～8.7	210	遺跡の範囲確認調査
蟻塚城跡（ありづかじょうせき）	伊那市美篶笠原（いなし みすず かさはら）	20209	340	35° 50′ 51″	138° 2′ 10″	2009 10.19～10.20	5.6	標識の設置に係る事前調査
地神原（じしんばら）	伊那市手良野口（いなし てら のぐち）	20209	171	35° 51′ 43″	138° 0′ 58″	2009 12.24～12.28	416	宅地造成に係る事前調査
伊那養護学校（いなようごがっこう）	伊那市西箕輪大萱（いなし にしみのわ おおがや）	20209	15	35° 52′ 45″	137° 55′ 57″	2010 1.22～2.1	48	教室棟建設に係る事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北　丘　C	集落跡	縄文時代	なし	縄文土器片	
堀	集落跡	縄文時代～ 鎌倉時代	なし	縄文土器片 黒曜石片	
蟻塚城跡	城　館	中　世	なし	中世・近世陶器片	
地　神　原	集落跡	縄文時代 平安時代	平安時代遺構 (詳細不明)	土師器片	
伊那養護学校	散布地	旧石器時代	なし	なし	

所収遺跡名	要　約
北　丘　C	展示施設の建設に伴い、試掘調査を実施。少量の遺物が出土したが、遺構は発見されなかった。
堀	遺跡想定範囲の境界付近へのグループホーム建設に伴い、試掘調査を実施。少量の遺物が出土したが、遺構は発見されず、今回調査区は遺跡の範囲ではないと思われる。
蟻塚城跡	標識の設置に伴い、試掘調査を実施。少量の遺物が出土したが、遺構は発見されなかった。
地　神　原	宅地造成に伴い、試掘調査を実施。平安時代の土師器を伴う遺構が発見され、弓良郷の存在を示す事例となった。
伊那養護学校	教室棟建設に伴い、試掘調査を実施。遺構・遺物ともに発見されなかった。

市内遺跡発掘調査報告書

－平成21年度　長野県伊那市内遺跡試掘調査報告書－

平成22年３月24日

編集・発行　長野県伊那市下新田3050番地
伊那市教育委員会

印　　刷　有限会社 しんこう社
長野県伊那市高遠町西高遠831